

「尾崎喜八の詩から」


尾崎喜八

1892年(明治25)東京生まれ1974年没「自然と心から詩を歌い出すこと。それが詩人尾崎喜八の全生命である」と評されている。 ベートーベン「第9」で有名なシラー「歓喜に寄す」の訳詞も手がける。

1945年東京空襲で自宅全焼。千葉、東京を転々とするも、自然に囲まれた土地への憧れが強まり、長野県諏訪郡富士見村の元伯爵の家を借る。戦前から長野の自然と山々への愛着は深く、この地に溶け込み、農耕に従事し村の青年たちと文学や自然を語り交流したと言われている。 「尾崎喜八の詩から」1975年 関西学院大学グリークラブ委嘱初演

「冬野」

いま 野には
大きな豎琴のような夕暮れが懸かる。
厳肅に切られた畝から畝へ霜がむすび、
風の長い琶音がはしり、
最初の白い星がひとつ
もっとも高い鍵を打つ。
冬は古代のようにひろびろと枯れ、
春はまだ遙かだが
予感はずでに
天地の間にゆらめいている。

終戦直後 千葉県三里塚(今は) 真冬 灰色の原野 夕景
開墾部落 広々とした松林と畑地に農家がポツンと建つ
(麦、甘藷、落花生)

↓「厳肅に」は激しすぎない

琶音：豎琴のアルペジオ (↓ハーモニー重視)

天空の高いところに一番星

最高音(豎琴の弦?鍵盤?)

↓鍵の最高音としてトップテナーの(As音)はしっかり

野は広く無表情に整然と枯れ広がる

春は大分先のことだが

春の予感天地の間に揺らめいている(天(風)、地(芽生え))

↓この次テナーやベースのハミングは揺らめきの表現?

わたしはこの暮れゆく晩い土をふんで
わたしの手から種子を播く、
夕日のようにみなぎって
信頼のために重い種子を。

[ここからがテーマ?重要]

暮れなずむ畑地の土を踏んで麦(?)の種をまいている

晩い：時期時刻は晩いとも書く

Q：信頼のためとは 必ず芽が吹く

Q：重い種とは 単純に重量?(地中に沈む) 希望?

それは沈む、
深く仕えるもののように、
地底の夜々を変貌して
おもむろに遠い黎明をあかるむために。

その種は深く土に沈み、暗い地底(地中?時代?敗戦?)を変貌(作物?世相)させて黎明(夜明け、新しい時代?)をもたらしてくれる。

Q：地底の夜々を変貌

黎明：夜明け、新しいことがはじまろうとしている

きよらかな
澄んだ凝縮が感じられる。
ただ周囲の蒼然たる沈黙のなかで
わたしの心が敬虔な讃歌だ。
そしてもう聴いている、
とりいれの野が祭のような、
燃える正午が翡翠色(かわせみいろ)の
海のような六月を.....

Q：清らかな澄んだ凝縮

蒼然：青いさま(夕方の薄暗いさま)

↓騒然ではない! 騒然を感じさせる演奏あり

敬虔：親や神々への深い愛や尊敬、忠誠心などを表す言葉
キリスト教? 収穫祭?

自分にはもう(聴いこえている)見えている?

六月の麦の取り入れの祭りの賑わいの歌が風に吹かれてうねるように波打つ翡翠色(ひすい)の麦畑の穂波が。

↓復興?平和?

いま 野には
大きな豎琴のような夕暮れが懸かる。
大きな豎琴のような夕暮れが懸かる。

Q元の情景に戻る必要性

↓「大きな豎琴のような～」を繰り返すことの意味

※「冬野」 テーマ 例えば・・・ 荒廃した土地を耕し、平和で豊かな祖国(自身、村の生活?)の復興を願う。